

ガラテヤ書4章12-31節 「律法の奴隷からの救出」

1A ガラテヤ人を案じる心 12-20

1B 以前にあった愛 12-15

2B 引き離された今 16-20

2A 奴隷の人と自由の人 21-31

1B アブラハムからの二人の子 21-23

2B 今のエルサレムと天のエルサレム 24-27

3B 肉なる者による約束の子の迫害 28-31

本文

ガラテヤ人への手紙4章を開いてください、私たちの学びは、後半部分 12 節からになります。私たちがガラテヤ書を学んでいる時に、にわかに世間が宗教カルトについて関心を持つようになりました。まさに、今、ガラテヤの信者が引きずり込まれているのが、異端カルトです。律法の中に引きずり込み、奴隷のようにさせています。パウロは、彼らが、神を知ったに、いや、神に知られているのに、かつての幼稚な教え、異教の儀式と同じように、ユダヤ教の儀式を、自分たちが義とされるための手段にしているという、悩み、心配しています。

1A ガラテヤ人を案じる心 12-20

1B 以前にあった愛 12-15

¹² 兄弟たち、あなたがたに願います。私もあなたがたのようになったのですから、あなたがたも私のようになってください。あなたがたは私に悪いことを何一つしていません。

パウロからの、ガラテヤの兄弟たちに対する思いを書いています。「私もあなたがたのようになったのですから」というのは、彼が厳格なパリサイ派であったのに、キリストに出会ったことによって、異邦人には異邦人のようにして振る舞い、それで彼らに福音を語りました。おそらく、彼らと食事もしたことでしょう。ユダヤ人でパリサイ派であれば、決して行わないことです。そうやって、ガラテヤの人たちのようになったからこそ、彼らはキリストを知ることができたのです。パウロは、福音のゆえに、ユダヤ人の律法の縛りから自由にされていました。あなたがたも、キリストにあって自由人であってほしいとお願いしています。

ところで、「あなたがたも私のようになってください」というのは、大胆なお願いですね。パウロは、他の手紙でも同じように書いています。「私ではなく、イエス様のようになってね。」と言うのではないのです。私を見ないで、イエス様を見てくださいというのは、言い訳ですね。そうではなく、自分がイエス様に従っているように、あなたもイエス様に倣ってね、という意味で、「私のようになってく

ださい」と言えるようにならないといけませんね。

そして、「あなたがたは私に悪いことを何一つしていません」と言っていますが、これは、パウロの手紙はかなり語調が強いので、パウロが何か自分たちから傷を受けたのではないかと彼らが思っているだろうと考えていました。ガラテヤの人たちは、人と人との関係、人間関係でパウロがこんなに厳しい口調になっていると思っていました。パウロは、そのような次元ではないのです。あくまでも、彼らを信仰において育てた者として、そのことが無駄になってしまうのではないかと、という心配でいっぱいだったのです。

この 12 節から 20 節においては、霊的に指導をし、教える人の心を見ていくことができます。父が子から嫌なことを言われても、父は子のことだけが心配で、接していきますね？子に言われた言葉を、大人から言われた嫌みな言葉と同じようには受け取りません。子の安寧のことを考えます。同じように、相手のことを心配したり、気にかけたり、祈っています。自分が傷付いた、とか、そういった次元で考えていません。相手が、キリストにあってどのようにしているか？ということに心が注がれているのです。

¹³ あなたがたが知っているとおりに、私が最初あなたがたに福音を伝えたのは、私の肉体が弱かったためでした。¹⁴ そして私の肉体には、あなたがたにとって試練となるものがあったのに、あなたがたは軽蔑したり嫌悪したりせず、かえって、私を神の御使いであるかのように、キリスト・イエスであるかのように、受け入れてくれました。

パウロのガラテヤ地方における宣教は、使徒の働き 14 章に書いてあります。ピシティアのアンティオキアから、イコニオンに行き、それからリステラとデルベに行きました。イコニオン、リステラ、デルベが、ガラテヤ地方の南部になります。そこに行ったのは、「私の肉体が弱かったため」と言っていますね。これが、一体どういうことなのか？というのが、いろいろな意見があります。その中の一つを紹介します。

パウロとバルナバは、キプロスから地中海を渡って、パンフィリア地方のペルゲに渡りました。そこでヨハネと呼ばれるマルコが一行から離れました(13:13)。その理由が、過酷な気候と、これからの陰しい旅にあったのではないとも言われます。マラリアの一種がそこにはびこっていたようで、パウロがそれに罹ったのではないかと、言われます。真っ赤に熱された鉄棒が、額に載せられたような激しい痛みを伴うのだそうです。ペルゲとピシディアのアンティオキアまで、高度 1 千メートル以上を登ります。高度が高いと症状が酷くなるようで、それでガリラヤ地方に、高度が少し下がるところに移動したのではないかと、いうものです。アンティオキアから西に向かう予定だったところが、高度が下がっている東に向かったのではないかと、いうことです。

そして、彼の見た目は、かなり酷いものになっていたのではないかとされます。それが、ここでパウロが、「そして私の肉体には、あなたがたにとって試練となるものがあった」というのです。しかし、ガラテヤの人たちには、純粋な信仰が与えられていました。純粋な、素朴な信仰が与えられていました。それが、神の御使いであるかのように、キリスト・イエスご自身であるかのように、受け入れたのです。これは、テサロニケの人たちの態度に似ています。「Iテサ 2:13 こういうわけで、私たちもまた、絶えず神に感謝しています。あなたがたが、私たちから聞いた神のことばを受けるとき、それを人間のことばとしてではなく、事実そのとおり神のことばとして受け入れてくれたからです。この神のことばは、信じているあなたがたのうちに働いています。」リステラにおいては、バルナバとパウロがギリシアの神々に祭り上げられようとして、行き過ぎはありましたが、しかし、それは神のことばの貴さを知って、その敬う思いの表れであったのです。真の福音は、このように、人々を見た目で判断せず、いや、むしろ土の器のように卑しく見えるところにある、神の栄光の輝きなのです。

¹⁵ それなのに、あなたがたの幸いは、今どこにあるのですか。私はあなたがたのために証しますが、あなたがたは、できることなら、自分の目をえぐり出して私に与えようとさえしたのです。

彼らが霊的に幸いを得ていたのですが、今はそうではありません。以前は、自分の目をえぐり出したいほどだったとありますが、パウロの目が相当、ひどく腫れていたのでしょうか、自分のものを分け与えたいと思ったほどだったのです。パウロが、もしかしたら目の病気かもしれないというのは、この手紙の最後に、「6:11 こんなに大きな字で、私はあなたがたに自分の手で書いています。」とあります。

2B 引き離された今 16-20

¹⁶ それでは、私はあなたがたに真理を語ったために、あなたがたの敵になったのでしょうか。

パウロが今、彼らが信じている福音は福音ではなく偽物であると言っていることによって、ガラテヤの人たちは、パウロを敵視し、警戒するようになったようです。ここで、真の友がどちらなのかを知る必要がありますね。傷を与えても、愛していることがあります。心地よいことを言っても、実は相手を憎んでいることがあります。私たちが教会として集まる時に、自分の気持ちを高揚させ、落ち着かせてくれる言葉だけではないのだということを知ることは大事です。真理は時に、私たちの心を突き刺します。自分が聖霊によって、居心地が悪くなることもあります。しかし、真理が愛によって語られる時、それは真実な癒しをもたらします。

¹⁷ あの人たちはあなたがたに対して熱心ですが、それは善意からではありません。彼らはあなたがたを私から引き離して、自分たちに熱心にならせようとしているのです。

偽物についての見分けは、とても難しいです。それは、見た目は、彼らがとても自分たちのことを慕ってくるからです。異端カルトの手法は、愛のシャワーなど呼ばれますが、いかにあなたがここで愛されているか、居場所があるかを伝えるのです。それで、その優しさに触れて、そこに入ります。すると、豹変します。自分の生活はその団体の奴隷状態になるのです。

ここで大事なのは、「自分たちに熱心にならせようとしている」というところです。人をキリストにつくようにさせるのではないのです。自分たちにつくようにさせます。これが、本物と偽物の違いです。そしてもう一つ興味深いのは、「引き離して」という言葉ですが、「鍵をかけて閉じ込める」というようなニュアンスがあります。パウロから引き離して、自分たちの中に閉じ込めてしまっているのです。旧統一協会であれば、家族から引き離して閉じ込めますね。そういったところでなくとも、既存の教会の指導者やその仲間をことさらに批判し、敵対的にさせて、そして自分たちのところに閉じ込めてしまうのです。

¹⁸ 善意から熱心に慕われるのは、いつでも良いことです。それは、私があなたがたと一緒にいる時だけではありません。

パウロは、熱心になること自体を否定してはなりません。善意から熱心に慕われるということは良いことです。この手紙の最後に、「6:10 私たちは機会があるうちに、すべての人に、特に信仰の家族に善を行いましょう。」とあります。自分たちが善を行っていて、それで熱心に慕われることについては、いつでも良いことだということです。それを、ガラテヤの人たちはパウロがいたころ、やっていたようですが、おそらく今は、やっていないのでしょう。もっと内向きになって、儀式的なことにはまっていったのだらうと思われます。自分がただ、受けるだけの教会になっているか？それとも、与えていく教会になっているか？確かめてみるべきですね。

¹⁹ 私の子どもたち。あなたがたのうちにキリストが形造られるまで、私は再びあなたがたのために産みの苦しみをしています。

パウロは、福音を初めから信じて、受け入れてもらう必要があるのかもしれないということで、とても心配しています。とても興味深い表現をしていますね。それは、あたかも母の胎に、キリストという胎児がいて、それが形作られて、赤ん坊として出産するという表現をしています。そのために、産みの苦しみをしていると言っています。人が救われるまでに、このような産みの苦しみをしている人々が、自分の周りの愛する人々のために労しているクリスチャンたちは、多くいます。そのような、やり直しをあなたがたにもしないといけないのか、とパウロは、悩んでいるのです。

ただ、ここは単なる比喻でもありません。御霊によって新たに生まれるとは、まさに神の種が自分に植えこまれたようなものです。そこでキリストが胎児として育つように、自分の中に形造られて、

自分自身の内にキリストが現れてくださいます。これが、教会の醍醐味です。パウロと、偽教師たちの違いは、パウロの働きでキリストが人々の内に形造られますが、偽教師たちは、彼ら自身の形がガラテヤの人たちに造られていってしまっているということです。

²⁰ 私は今、あなたがたと一緒にいて、口調を変えて話せたらと思います。あなたがたのことで私は途方に暮れているのです。

これは、このような厳しい手紙を書いている人の悩みだと思います。文字によって、かなり厳しく聞こえていますが、一緒にいれば、実はそんなことはないことが分かります。そして口調を変えて話しても、何を意図しているのかが伝わります。けれども、パウロがそこに行くのも拒まれているのかもしれない。それで、途方に暮れているのです。

2A 奴隷の人と自由の人 21-31

そしてパウロは、さらに律法の下に生きることの問題を説明していきます。21 節から、そして4章に、「奴隷」と「自由」という二つのキーワードが出てきます。

1B アブラハムからの二人の子 21-23

²¹ 律法の下にいたいと思う人たち、私に答えてください。あなたがたは律法の言うことを聞かないのですか。

ユダヤ主義者らに教えられて信奉している人々、また影響を受けている人々は、自分たちは律法の下にいると誇っていたことでしょう。つまり、私たちは聖書をしっかり学んでいると自負している者たちです。今、ガラテヤの教会のようなものが現れたら、私たちは意外に、「すごい、この人たち」と、うらやむかもしれないのです。パウロはむしろ、それほど知識のない人々に愛情を注ぎ、主の福音に仕えていたと思います。しかし、パウロは、律法の世界を極めた人の一人です。律法については、非の打ち所がないと彼自身が言っています。その律法が、人々を奴隷にしてしまうという矛盾を彼自身がそうであったからです。いや、律法そのものが問題なのではなく、律法によって自分が神の前で義と認められるためにそれを守り行っていることが、どれほど人を奴隷にしてしまうのかを教えられます。

²² アブラハムには二人の息子がいて、一人は女奴隷から、一人は自由の女から生まれた、と書かれています。

律法は厳密には、モーセによって与えられた律法です。けれども、創世記から申命記全体も、律法と呼ばれます。ですから、創世記に書かれているアブラハムの生涯は、律法の中に含まれます。パウロは、2 章からずっと、アブラハムについて話していますね。ユダヤ教では、ユダヤ人がアブ

ラハムの子孫であることを誇りにしています。子孫であることが救いの保証であるとまでしたのです。それで、ユダヤ主義者は、イエスだけを信じても足りない。ユダヤ教に改宗しないといけないと教えていたのです。

そこで、パウロは、「あなたがたはアブラハムの子であることを誇っているが、そこには二人の息子がいるのだよ。あなたは、どちらの子孫になっていますか？」と問い返しているのです。アブラハムには、イシュマエルが生まれました。サラの女奴隷ハガルからの子です。そして、イサクが生まれました、サラからの子です。そして午前礼拝で説明しましたように、アブラハムには、神から自分から子孫が出てくることを約束されていました。それを信じていました。ところが、妻サラが、自分の女奴隷によって、子を生んでください。そうすれば、その子孫ができることを果たすことができるでしょう、という要望を出したのです。それでハガルによって生まれたのがイシュマエルです。

²³ 女奴隷の子は肉によって生まれたのに対し、自由の女の子は約束によって生まれました。

サラの言っていることに聞き従い、アブラハムがハガルによって生んだのは、「肉によって生まれた」と言っています。律法の下に生きることについて、それは肉の力によって行っているのだ、とパウロは、はっきりと言っています。それに対して、約束を信じる信仰によって生きるのは、御霊によるものであり、そこには自由があるということなのです。

このことを知るのには本当に大切なので、午前礼拝でも説明しましたが繰り返します。神の恵みは自由を与えます。自分が正しいかどうかを見測るのに、自分自身を見ません。自分のために、神がキリストにあってしてくださったことを見ます。キリストが十字架に付けられ、三日目によみがえられたところに、自分が神の前に立てる理由があるとみなします。そして、イエスご自身に信頼して歩むことに献身します。この方を信じ、約束を信じていくのです。御霊が信じた時に与えられています。その御霊の力と導きによって、主が命じられることに聞き従うのです。

けれども、自分が正しいのかどうか、いつも不安で、それで、これこれをしなければいけないと焦っているのは、律法の下にいる生き方です。そこで、自分を安心させるために、これこれのことをしなければいけないと言われている掟を守ることによって、自分を安心させようとします。ある時は調子いいから、自分は何となくうまく行っていると自負します、けれども、多くの場合は、自分ではできていないと苛まされます。それで、こんな方法があるからやってみると良いという方法論を探します。それは、必ずしも厳格に掟を守るということだけに限りません。それなりに、クリスチャン生活をやりくりしていればいいのだ、という助言とか。ノウハウ、方法を見つけて、その行動に基づいていけば、神は自分をそこそよく見ていると思います。

このような、律法の下に生きていることは、自分中心なのです。自分がきちんとできているか、

できていないのか、という自意識の中で生きているからです。そこには愛がありません。人々に、それ相応によく見られているかどうかの、パフォーマンス、行為が中心になっているからです。そして、何か失敗をすると、何か行いによってそれを償おうとします。しかし、恵みの下にいる人は、自分自身の過ち、罪、恥は、主ご自身が覆ってくださる、尻ぬぐいをしてくださったことを知っています。だから、そのままの自分でいられるのです。ありのままの自分であることは、プライドが許さない、恥ずかしいことです。しかし、そうやってへりくだって、キリストの血によって清められていることを思って、神の前に、また人々の前に立つのです。

律法の下に生きる人は、かならずボロが出ます。見た目には、よく見られます。けれども、肉の力によって行っているの、いわゆる肉の行いが現れます。争い妬み、そしり、高ぶりなどです。また、際立った二重生活も見られます。厳しいことを信徒たちに課していても、自分自身は淫らな行い、醜悪、金銭に貪欲など、肉の働きに関わっています。

2B 今のエルサレムと天のエルサレム 24-27

²⁴ ここには比喩的な意味があります。この女たちは二つの契約を表しています。一方はシナイ山から出ていて、奴隷となる子を産みます。それはハガルのことです。²⁵ このハガルは、アラビアにあるシナイ山のことで、今のエルサレムに当たります。なぜなら、今のエルサレムは、彼女の子らとともに奴隷となっているからです。²⁶ しかし、上にあるエルサレムは自由の女であり、私たちの母です。

パウロは、「**比喩的な意味**」と言っています。ユダヤ人の中には、聖書に対していくつかの方法があり、その一つはミドラシュというものがありました。それは、聖書の書かれていることは歴史的事実であり、それが第一であるけれども、神の教えを教える霊的な真理でもあるという読み方です。

ここではハガルとサラが、二つの契約、古い契約と新しい契約を代表しているとパウロは言います。神がアブラハムに約束を与えられ、そこには自由があったのに、モーセによって律法が入り、それで彼らが違反していました。しかし、神はその契約を更新して、新たにすることを約束されました。「エレ 31:31-33 見よ、その時代が来る——【主】のことば——。そのとき、わたしはイスラエルの家およびユダの家と、新しい契約を結ぶ。32 その契約は、わたしが彼らの先祖の手を取って、エジプトの地から導き出した日に、彼らと結んだ契約のようではない。わたしは彼らの主であったのに、彼らはわたしの契約を破った——【主】のことば——。33 これらの日の後に、わたしがイスラエルの家と結ぶ契約はこうである——【主】のことば——。わたしは、わたしの律法を彼らのただ中に置き、彼らの心にこれを書き記す。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。」

古い契約はシナイ山から出ました。そしてシナイ山から出た契約とその律法は、女奴隷ハガルのように、奴隷のままにしておきます。つまり、罪から解放されることはないと教えます。そしてパ

ウロは現代のユダヤ人の社会に当てはめず。アラビアにあったシナイ山は、「今はエルサレムに当たる」と言っています。この意味するところは、その地上にある神殿礼拝が、肉によって律法を守ろうとしている試みに他ならなかったのです。人々をがんじがらめにしていますが、心にある罪や肉の欲望に対してなんら効き目がない、ということです。

けれども、サラは新しい契約を表していました。そして、シナイ山と対比してエルサレムを山として持っています。そのエルサレムは地上にあるエルサレムではなく、天からのエルサレムであります。それが書かれているのは、黙示録 21 章です。「21:2 私はまた、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために飾られた花嫁のように整えられて、神のみもとから、天から降って来るのを見た。」主が御座におられるのは天においてです。そこには、自由があります。そして、その上からの賜物で、私たちは新しく生まれました。御霊によって生まれました。地上には生きているのですが、上から生まれており、そして私たちの故郷は天になりました。そして、主なる神は、すべての天地を過ぎ去らせて、新しい天と地に再創造し、そして御座のある天をその新しい地に降ろしていかれます。その天から生まれていて、私たちは生きているのだということです。

ですから、私たちが、ああだこうだと、自分のやっていることでクリスチャン生活を推し量ろうとしていること自体が、間違いです。私たちは徹底的に、学校で頑張って勉強していこうという根性が組み込まれています。また会社で業績を上げるための精神が培われています。それは、女奴隷ハガルから生まれた子になってしまいます。自分がどうであろうとも、自分を愛しておられる主が、おられるのです。この方を信頼することが私たちの務めです。その時に御霊が働かれます。アブラハムが不可能なことを信じ、その結果、約束の子イサクが生まれました。私たちも、死者の中からよみがえられたイエスを信じています。その結果、御霊によって新しく生まれたのです。超自然のことを、神は私たちの何気ない歩み、キリストとの歩みの中で成し遂げていかれるのです。

²⁷ なぜなら、こう書いてあるからです。「子を産まない不妊の女よ、喜び歌え。産みの苦しみを知らない女よ、喜び叫べ。夫に捨てられた女の子どもは、夫のある女の子どもよりも多いからだ。」

これはイザヤ書 54 章 1 節からの引用です。エルサレムが破壊されて久しくなって、他の異邦の諸国が栄えていたとしても、終わりには彼女は多くの子孫を宿すという約束です。主が再臨されたあとの、神の国におけるエルサレムの地位を預言したものです。けれども、ここではこれを霊的原則として取り扱っています。すなわち、御霊によって始まった者たちは、サラがイサクを生み、それから多くのイスラエルの子孫が生まれたように、今現在は、不妊の女のように結果が見えないように見えるのです。なかなか目には、実が結ばれていると感じられないということです。パウロが肉体に試練を持っていて、彼らの信仰にも試みになるのではないかと思われたのです。不妊の女のように見られる部分があるということです。

しかし、本当に実を結ぶのは、御霊に留まることなのです。多くの肉によって生み出した事柄は、その実質的な実を見て、恥じ入ることになります。どこに実質があり、命があったのかと言えば、そのみすばらしく見えるようなところにあったということです。何も変わらない福音の中にありました。ところが、福音ではないところに他の活路を見いだしてそれを成し遂げても、一時的は多くの実を結んでいるように見えますが、実はそうではないということです。

3B 肉なる者による約束の子の迫害 28-31

²⁸ 兄弟たち、あなたがたはイサクのように約束の子どもです。²⁹ けれども、あのとき、肉によって生まれた者が、御霊によって生まれた者を迫害したように、今もそのとおりになっています。

信仰によって義と認められた者たちは、イサクのように神の約束によって新たに生まれました。神の子どもになりました。けれども、イサクのことを思い出してください、肉によって生まれたイシュマエルが、彼が乳離れの祝いの時に、イサクをからかいました。これが、肉によって生まれた者が、御霊によって生まれた者を迫害することを良く表しています。聖書では、それが何度となく出てきます。イエス様もパリサイ派、律法学者に語られましたが、迫害しているのは、肉の人が、信仰による人を迫害する人々でした。アベルが信じて、兄カインが殺しました。サウルが、イスラエルの王でありましたが、信仰によって生きて、神にイスラエルの王として選ばれたダビデを迫害しました。預言者たちを迫害した多くが、神殿に仕えていた祭司たちや、他の偽預言者たちです。

私がイスラエルに旅行に行った時に、ベツレヘムに入りました。パレスチナ自治区内なので、ガイドさんもパレスチナ人でした。彼は伝統的なキリスト教徒ではなく、イエス様を信じ、新たに生まれた、福音的なクリスチャンでした。彼が興味深いことを話したのです。ベツレヘムは、イスラム教徒の人口が増えて、キリスト教徒が迫害されていると言われていました。けれども、「イスラム教徒とは、共生しています。問題は、自分が正教会の家なので、イエス様を信じたら、正教徒である家族や親戚が、圧力をかけることです。」正教会といっても、実際に信じて救われているわけではなく、伝統的に守っているだけのことが多いです。そこに本気で信じた人たちが現れました。それで、迫害するのです。

それと同じようなことが起こります。キリスト者が御霊によって歩もうとする時に、邪魔をするのは肉によって生きている、仲間であるはずのキリスト者たちなのです。教会と関係のない、世に住む人々から迫害を受けるというのは、実はそれほど大変なことではありません。元々、神を知らないのですから仕方がないことです。しかし、教会の中にながらにして、地上に軸足を置いている人々が、天からの賜物、御霊の導きを求めない人が、妬んで争い、そしり、陰口などを行っていきます。遠くにいる世の人よりも、近くにいる肉の人が迫害しているというのが、聖書のカインの時から、イエス様を殺した宗教指導者に至るまで一貫しています。

³⁰ しかし、聖書は何と言っていますか。「女奴隷とその子どもを追い出してください。女奴隷の子どもは、決して自由の女の子どもとともに相続すべきではないのです。」

これは、イシュマエルがイサクをからかっているのを見た時、サラがアブラハムに、ハガルもイシュマエルも追い出してくださいと願いました。それをアブラハムは心を痛めましたが、主もサラの言うとおりにしなさいと命じられて、彼らは共に相続するはなくなりました。つまり、ここでパウロは、肉による者は、決して神の国を相続することはできない、ということをお話しています。信仰によって、御霊によって生きる中に、少し肉の力を混ぜて生きて行ってもいいだろうということは、一切できないのです。肉の人はもっぱら肉のことしか考えられないのです。御霊の人は、もっぱら神のことだけで生きるのです。これを混ぜ合わせることはできないのです。どちらかしかできません。

私の尊敬する聖書教師が、説教の中で教えてくれました。肉によって生きているか、御霊によって生きているか、どの程度ですか？というのを、左端が肉の生活、右端が御霊の生活で、その間を線で引いて、自分はどこら辺かを教えてください、としたそうです。ある人は、70%が肉の生活、30%が御霊の生活。そしてまたある人は、五分五分、真ん中に書き入れたりしました。彼はこう言いました。その線を消してしまいました。「どちらかしかありません。肉だけか、御霊だけか、なのです。」肉によるもので、御霊のことは全く成し遂げることはできません。逆に、御霊によって生きるなら、そこには肉による頑張りを加えることは一切できないのです。

「えっそんな！であれば、私は100%肉なんですね。」と反応されたでしょうか？そうであれば、全くの勘違いです。もう一度思い出してください、肉か、御霊かを分ける分かれ目は、神の恵みです。神がキリストにあって、自分のためにしてくださったこと、しておられることを信じるのが、御霊なのです。それ以外に、自分がああだこうだ、とやっていることが肉なのです。ですから、次の結論を見てください。

³¹ こういうわけで、兄弟たち、私たちは女奴隷の子どもではなく、自由の女の子どもです。

律法の下に戻って行ったガラテヤ人たちを、パウロは、「私たちは女奴隷の子どもではなく、自由の女の子どもです」とはっきり言っているのです。これは、神がしてくださったことを思い出し、そこに立ち返り、初めの信仰に戻る事なのです。決して、自分のやりくりでうまく行く者ではありません。自分に対しては、キリストとともに死んでいます。よみがえられたキリストを信頼して、大胆に生きていくことのみが、自由への道なのです。